令和七年盂蘭盆会法要の砌（令和七年八月一五日）

盂蘭盆御書　　弘安二年七月一三日　　五八歳

盂(う)蘭(ら)盆(ぼん)と申(もう)し候(そうろう)事(ごと)は、仏の御(み)弟(で)子(し)の中に、目(もく)連(れん)尊(そん)者(じや)と申して舎(しや)利(り)弗(ほつ)にならびて智(ち)慧(え)第(だい)一(いち)・神(じん)通(ずう)第(だい)一(いち)と申して、須(しゆ)弥(み)山(せん)に日(にち)月(がつ)のならび、大(だい)王(おう)に左(さ)右(ゆう)の臣(しん)のごとくにをは(御座)せし人(ひと)となり。此(こ)の人(ひと)の父(ちち)をば吉(きつ)懺(せん)師(し)子(し)と申し、母をば青(しよう)提(だい)女(によ)と申す。其の母の慳(けん)貪(どん)の科(とが)によて餓(が)鬼(き)道(どう)に堕(お)ちて候(そうら)ひしを、目連尊者のすくい給(たま)ふより事(こと)をこりて候。

其(そ)の因(いん)縁(ねん)は母は餓(が)鬼(き)道(どう)に堕(お)ちてなげき候(そうら)ひけれども、目(もく)連(れん)は凡(ぼん)夫(ぷ)なれば知(し)ることなし。幼(よう)少(しよう)にして外(げ)道(どう)の家に入り、四(し)井(い)陀(だ)・十八大(だい)経(きよう)と申す外(げ)道(どう)の一(いつ)切(さい)経(きよう)をならいつくせども、いまだ其(そ)の母(はは)の生(しよう)処(しよ)をしらず。其(そ)の後(ご)十三のとし、舎(しや)利(り)弗(ほつ)とともに釈(しや)迦(か)仏(ぶつ)にまいりて御(み)弟(で)子(し)となり、見(けん)惑(わく)をだんじて初(しよ)果(か)の聖(せい)人(じん)となり、修(しゆ)惑(わく)を断(だん)じて阿(あ)羅(ら)漢(かん)となりて、三(さん)明(みよう)をそなへ六(ろく)通(つう)をへ(得)給(たま)へり。天(てん)眼(げん)をひらいて三(さん)千(ぜん)大(だい)千(せん)世(せ)界(かい)を明(めい)鏡(きよう)のかげのごとく御(ご)らむ(覧)ありしかば、大(だい)地(ち)をみ(見)とを(透)し三(さん)悪(なく)道(どう)を見(み)る事(こと)、氷(こおり)の下(した)に候(そうろう)魚(さかな)を朝(あさ)日(ひ)にむかいて我(われ)等(ら)がとを(透)しみるがごとし。其(そ)の中(なか)に餓(が)鬼(き)道(どう)と申(もう)すところに我(わ)が母(はは)あり。のむ事(こと)なし、食らふ(く)ことなし。皮(かわ)はきんてう(金鳥)をむしれるがごとく、骨はまろき石(いし)をならべたるがごとし。頭(こうべ)はまりのごとく、頚(くび)はいと(糸)のごとし。腹(はら)は大(たい)海(かい)のごとし。口(くち)をはり手(て)を合(あ)はせて物(もの)をこ(乞)へる形(かたち)は、う(飢)へたるひる(蛭)の人のか(香)をかげるがごとし。先(せん)生(じよう)の子(こ)をみてな(泣)かんとするすがた、うへたるかたち、たとへをとるに及(およ)ばず。いかんがかな(悲)しかりけん。　（一三七四頁）

只今は盂蘭盆会に当りまして、只今は皆様方と共に読経・唱題申し上げまして新盆会の御供養を奉修申し上げました。さぞかし物故いたされた精(しよう)霊(りよう)も皆様方の真心からの御供養に感謝いたされている事と存ずる次第であります。

この盂蘭盆会については皆様方も既にご案内の事とは存じます。また年に一回の恒例の行事になっておりますので、何度となく、その謂(いわ)れはお聞きになっておられる事と思います。しかし、先程拝読しました盂蘭盆御書を今一度拝して盂蘭盆について申しますと、盂蘭盆の「盂蘭」とは梵語で「倒懸(とうけん)」という意味でありますが、これは手足を縛(しば)って逆さまに吊(つ)るすという意味です。つまり、餓鬼道の飢(う)えや渇(かわ)きの苦しみが、あたかも、逆(さか)さに吊(つ)るされた苦しみに似ているところから、このように云われ、また「盆」とは、それを救う器(うつわ)という意味であります。

つまり、地獄に堕ちて苦しんでいる者を救うために、百味の飲食(おんじき)を盆に盛って、聖僧を通じて仏に供養し、その苦しみを取り除いて成仏に導くという儀式であります。

盂蘭盆御書に依りますと、昔、お釈迦様には十大弟子と申しまして十人の優れたお弟子が居られましたが、その中に、智慧第一・神通力第一といわれた目連尊者がおられました。この目連尊者は幼い時に生母と死に別れてしまったので、親孝行をする事が出来ず、そのことを残念に思い、とても悲しく思っていました。

そこで母の様子を知りたいものと思い、目連尊者は最初は外道のバラモンの修行をしていましたが、十三歳の時に、舎(しや)利(り)弗(ほつ)と共に釈尊の御弟子となりました。そして、見惑を断じて初果の聖人となり、修惑を断じて阿羅漢となって三明(宿(しゅく)命(みよう)通(つう)- 自分の過去世（前世)を知る力。天(てん)眼(げん)通(つう)- 他人の過去世（前世）を知る力。漏(ろ)尽(じん)通(つう)- 自分の煩悩が尽きて、今生を最後に、生まれ変わることはなくなったと知る力)を具え六神通(仏や菩薩などがそなえるとされた六種の超人的な能力。①神(じん)足(そく)通(つう)（神境通、如意神通とも)。自身の変現が自在で、どこにでも行ける能力。②天(てん)眼(げん)通(つう)。遠近大小にかかわらず何でも見える能力。③天(てん)耳(に)通(つう)。何でも聞こえる能力。④他(た)心(しん)通(つう)。他人の考えが分かる能力。⑤宿(しゅく)命(みよう)通(つう)。衆生の過去世の生涯がわかる能力。⑥漏(ろ)尽(じん)通(つう)。一切の煩悩を断じ尽くすことができる能力)を得て、その神通力をもって三千大千世界を見渡したところ、驚いたことに母の青提女は、慳貪の罪といって、生前、仏様への供養を惜しんだ罪によって、死後餓鬼道に堕ち、見るも無(む)惨(ざん)な姿で苦しんでいました。目連尊者は、さっそく神通力で食物を送って母を助けようとしたのでありますが、その食物は忽(たちま)ちのうちに火となって燃え上がり、それを消そうとして注いだ水も、かえって油となって燃え広がり、火だるまになった母は、悲鳴をあげて歎き苦しむ結果なってしまいました。目連尊者は自分の力ではどうすることも出来ず、急いで釈尊(お釈迦様)の所へかけつけ、母を救う道を乞(こ)いました。釈尊は目連に対して次のように言われました。「目連よ、常々善いことをしていれば善い結果が報(むく)いられ、悪い種子(たね)を蒔(ま)けば悪い実(み)がみのるのである。お前の母は、自分の欲ばかりに目がくらみ、恵(めぐ)みということを知らなかった。それ故に死んだ後まで欲(よく)心(しん)に縛(しば)られて、そのように苦しまなければならないのである。これを因(いん)果(が)応(おう)報(ほう)と云うのである。しかるに、お前が一日も早く仏の正しい道を悟ることが大切なことである。そのことによってお前の母の浅ましい心も直ることであろうと。しかし、さし当たり七月十五日に、百味の飲食(おんじき)を供え、十方の聖僧を招いて供養しなさい。そうすれば、母を餓(が)鬼(き)道(どう)一(いつ)劫(こう)(人間の五百生)から救いだすことができよう」と釈尊は述べられたのであります。目連尊者は、その教え通りに実践して、はじめて母を餓鬼道一劫(こう)の苦から逃(のが)れさせることができました。

喜んだ目連尊者は「この大功徳を、自分一人に止(とど)まらず、未来世の人々にも伝えて、その人達の父母はもとより、七世の父母にも功徳善根(ぜんこん)を積ませてあげたい」と、仏に願ったところ、釈尊は「それは、私の思うところである」と、一座の大衆に対して、のちのちまでも、この仏事を怠(おこた)りなく行なうことを勧(すす)められました。これが盂蘭盆会の起こりとなったのであります。

さて、目連尊者が得意の神通力をもっても母を救うことができなかった理由(わけ)は、目連尊者が悟った阿羅(あら)漢(かん)果(か)とは、小乗の悟りであり、最高の法華経には遠く及ばなかったからです。釈尊の教えに従がってようやく母親を救い出すことができたものの、それは、聖僧の唱えた南無妙法蓮華経の功徳によって、僅(わず)かに餓鬼道一劫の苦を救ったにすぎません

でした。

日蓮大聖人は盂蘭盆御書（一三七六頁）に「目連が色心は父母の遺体なり。目連が色心、仏になりしかば父母の身も又仏になりぬ。」と仰せであり、更に又『目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給ふ。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存外に仏となり給ふ。乃至代々の子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生三悪道をはなるゝのみならず、皆初住・妙覚の仏となりぬ。故に法華経の第三に云はく「願はくは此の功徳を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。』とも仰せられている如く、その功徳は計り知れないものである申され、そして真の成仏は目連尊者が、後に法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱えた時に、はじめて自分自身が、多摩羅跋(たまらば)栴檀香仏(せんだんこうぶつ)という仏になり、その功徳によって、父母を成仏に導くことが出来たのです。

しかしながら、目連尊者の母を救うことができた文上の法華経も、いま末法においてはまったく在(ざい)世(せ)脱(だっ)益(ちゃく)の法にすぎず、現在これに固執していては、先祖の成仏は望めないし、目連尊者が母を苦しめたと同じ苦汁(くじゅう)を、先祖になめさせることも知らなくてはなりません。つまり、末法の法華経とは、御本仏日蓮大聖人の御当体である、人法一箇の御本尊以外になく、この御本尊に、南無妙法蓮華経と唱えた時、はじめて境智冥合して成仏の境界を得るのであり、その功徳によって先祖の成仏が出来るのです。また、草木成仏の深い原理にもとづき、塔婆を立てて先祖の菩提を弔(とむ)らいますが、これも塔婆に書写した妙法蓮華経の功徳をうけて、各精(しょう)霊(りょう)は霊山浄土に安住することができるのです。

本宗においては、常盆、常彼岸といって、毎日がお盆であり、お彼岸であると心得て、先祖の供養を怠りなくしていくことはいうまでもありませんが、ここに盂蘭盆会という特別な法要日を設けることも、決して意味のないことではありません。つまり先祖の供養と同時に、各々の信心に新らたな心構えをもたせ、また、間違った教えで盂蘭盆会を行なっている人々に、本当のお盆を教えて、成仏に対する認識を改めさせるのです。そして爾前教の行事から真実の本門の行事に引(いん)入(にゅう)し、さらに御本尊への結縁を深めていくという意味から、大事な行事と言えましょう。

末法万年の闇を救う御本尊のもとに、まず自分自身が仏になることが肝要であり、その功徳を先祖に回向することこそ、真実の盂蘭盆会であり、末法今時においては、正しい盂蘭盆会を行なっているといえるのです。　以上。

（令和七年盂蘭盆会法要の砌　令和七年八月一五日）